

「汝、自己（おのれ）のために、何（なに）の偶像をも彫（きざ）むべからず」

「あなたはいかなる像も造ってはならない。上は天にあり、下は地にあり、また地の下の水の中にある、いかなるものの形も造ってはならない。あなたはそれらに向かってひれ伏したり、それらに仕えたりしてはならない。わたしは主、あなたの神。わたしは熱情の神である。わたしを否む者には、父祖の罪を子孫に三代、四代までも問うが、わたしを愛し、わたしの戒めを守る者には、幾千代にも及ぶ慈しみを与える。」（出エジプト記 20:4~6）

出エジプト記 32 章を見ると、山からなかなか下りて来ないモーセを待ちきれなくなったイスラエルの民はアロンに言います。「さあ、我々に先立って進む神々を造ってください。エジプトの国から我々を導き上った人、あのモーセがどうなってしまったのか分からないからです」。見えるものを失った人々の不安がよく表れています。そのような人たちの要求に負けて、アロンは若い雄牛の鑄像を造ります。彼らは「イスラエルよ、これこそあなたをエジプトの国から導き上ったあなたの神々だ」と叫びながらお祭り騒ぎをします。

それを知った神様は、イスラエルが墮落し、早くも私が命じた道からそれていると怒りに燃え、彼らを滅ぼし尽くそうとします。それでも、切実なモーセの執り成しの祈りによって、神様は思い直すこととなりますが、この話に現れているように、人間は確実に見えるものを拝もうとします。それで、人間の手で神の形を作ろうとするのです。そのような有限なものの中に、無限な神様を入れようとしています。人間自己中心の神崇拜です。

神様から造られたものが神様を造ることはできません。神様は自由なお方です。そして、神様が示す方法によってのみ私たちは真の礼拝ができるのです。神様が霊であるということは、見えないみ言葉とお働きによって神様の存在が示されるということです。そのような神様と私たちは人格的な交わりができます。情熱の神、それはねたむ神とも言えますが、それは私たちへの愛のゆえです。神様を中心とすることは人間を無視したり、抑圧するのではなく、人間を人間らしく、自由な存在として、拝むべき方を正しい方法で礼拝させるためです。

古代において偶像を造るときに形を刻むところから「彫むべからず」という言葉になっています。見える偶像にひれ伏し、仕えることをいかに神様が怒っておられるのか、私たちに向けられた、燃えるような神様の愛を私たちは心に刻むべきです。

***共に祈りましょう。**

- ・見える神の像を求める私たちの弱さと罪深さを赦してくださいように祈りましょう。
- ・人間が造ったものを拝もうとする誘惑から私たちを守ってくださいように祈りましょう。
- ・虚しい偶像の前にひれ伏す人々が、真の神様を信じて礼拝することができますように祈りましょう。